

山根常男 『キブツその社会学的分析』

誌名	農業総合研究
ISSN	03873242
著者名	綿谷, 昶夫
発行元	農林省農業総合研究所
巻/号	19巻4号
掲載ページ	p. 225-231
発行年月	1965年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



山根常男

『キブツ その社会学的分析』

綿谷 起夫

一

イスラエルのキブツは、社会主義諸国をもふくめた世界各国の農業共同化のうちでいちばん共同化が徹底したものである。土地は国有であつてこれを集団として共同で借入れ、それ以外の生産手段は集団の共同所有であり、さらに消費手段のほとんども集団の共同所有になっている。したがってたんに農業経営が集団単位に共同化しているだけでなく、消費生活や子供の哺育、教育も基本的には集団単位に共同化している。しかもこの集団の社会的性格は、社会的正義と平等と相互扶助を理想とする、自由意思的、非強制的、民主々義的な結びつきである。

このようなキブツの集団がイスラエルに二二九ある。その農業人口は全国のそのの一八・五%を、その農業生産額は全国のそのの二六・四%をしめている。イスエルの農業は、このキブツのほかにモンシャヴ・オヴデイム、モンシャヴ・シトフィ、モンシャヴなど色々な類型のものからなりたつてているが、そのうちで生産性がいちばん高いのは共同化の程度がいちばん高いキブツなのである。がんならい農業の共同化は大規模生産の実現をつうじて生産性を向上させる方式であるが、現実はかならずしもこの理屈どおりにはいっていない。社会主義諸国の例でみても、共同化の結果、かえつて生産性向上が鈍化したことも少なくないようである。これに反してキブツのばあいは、共同化の程度と生産性向上とは並行しており、そのいみでは世界各国をつうじて共同化がいちばん成功したお手本だといえる。この成功は、なににもとづくものだろうか。

さいきんわが国でもキブツにたいしてかなり関心が持たれてきている。これを紹介した書物や雑誌記事が数多くあらわれているし、自分でその生活を体験しようといスラエルへ渡つた人も少なくない。このような関心には色々理由があるだろうが、そのひとつとして、ここ数年來わが国でも新しい農業の建設をめざして何千という数の共同経営ができたが、現在までのところまだ成功とはいえない状態にあり、これをどう打開するかを

模索するために、共同化の成功事例としてのキブツに関心が向いてきたことがあげられる。そしてキブツのばあい特に関心が持たれるのは、共同化の経営技術的な側面よりも、その担い手としての集団そのものや、その構成員の主體的なあり方であろう。私がここで大阪市大教授山根常男氏の名著『キブツ その社会学的分析』を紹介するにあたって、この点に重きをおく。

二

本書の序論を読むと、山根氏がキブツ研究を始められた直接の動機は、そこでの家族の特異性であった。たとえば子供は生まれたときから親とは離れて、他の同年令の子供たちといっしょに「子供の家」にすみ、専門の保姆や教育者の手で集団的に養育されている。このように普通の社会の家族とはまったく違うがそれでいて子供の肉体的、精神的発達は無調なようである。だとすれば家族の本質はどうあるべきかということが、山根氏の抱いた問題意識であった。

しかしながらキブツでは、その集団全体と家族とは機能的に結びついており、普通の社会では家族がになう機能の多くを集団が肩代りしている。家族は集団全体から切りはなしては考えられない。しかもこの集団はあらゆる意味で自治性をつよく求めるコミュニケーションであり、政治的、経済的、文化的に統合され

た機能的統一体をなしている。

このようにしてキブツにおける家族の研究は必然的にキブツそのものの研究に拡大し、キブツの歴史的形成、経済、政治、社会関係、文化、さらに外部社会との関係などキブツのあらゆる側面を包括的にとりあつかう内容のものになったのである。左に本書のおおまかな構成をしめしておこう。

一 キブツの形成とその社会的背景

1 シオニスムの歴史的背景

2 パレスチナ植民

3 クヴツアの誕生

4 キブツの発展

二 定型としてのキブツの基本的性格

5 キブツの生活環境

6 キブツの社会的・文化的性格

三 キブツの経済組織

7 キブツ経済の基調

8 労働組織

9 キブツにおける生産

10 消費組織

四 キブツの社会組織

11 フォーマルな社会組織の原理

- 12 キブツにおける政治組織
 - 13 インフォーマルな社会組織
 - 14 家族関係
 - 15 文化的活動
 - 五 キブツにおける人間形成
 - 16 教育にたいする一般的态度
 - 17 集団主義的教育
 - 18 キブツにおける社会化
 - 六 キブツと外的社会との関係
 - 19 キブツの社会的存在
 - 20 公的機関との関係
 - 21 キブツ相互の関係
- これでも分るように、本書はキブツのあらゆる側面を網羅した百科全書的な内容のものであるが、そのうちで特に私の注意をひいたのは、次の点にかんする叙述であった。それはキブツか一面では各個人の自由意思的、非強制的、民主々義的な集団であり、他面では農業経営だけでなく、消費生活や子供の養育までに及ぶ徹底した共同化を行なっており、しかも高度の生産性を發揮しているとするならば、そのさいに生産性向上のインセンチヴになつてゐるものは何かという点である。
- イスラエルの農業共同化のなかでキブツとは対照的な類型が、

モシャウ・オウディムである。ここでは土地こそ国有であるが、これを各戸単位に分割し、それぞれ私有の生産手段と家族労力とで耕作している。ここで生産性向上のインセンチヴになつてゐるのは、各人の私的利益の追求と私有物にたいする愛着である。もちろんここでも農業経営の一部分は共同化されているが、それはあくまで各戸の個別経営に奉仕する手段にすぎない。

これにたいしてキブツは、生産手段も消費手段も集団の共有であつて、私有物は原則として存在しない。各人は労働にたいする報酬としての賃銀を支給されるのでないから、個人や家族にとつて収入はない。消費生活は集団が単位であるが、そこでの各人の享受分は相対的に平等であつて、性や年令による必要度におうじた差別があるだけで、各人の職業や仕事の別による貢献度におうじた差別はまったく認められていない。

それにもかかわらず各人は集団の農場およびそこで使用される機械施設や家畜などにたいして、自作農がじふんの私有の農場や機械施設、家畜にたいするのと同じ愛着を持つており、また集団の利益をじふんの利益と同じに考へている。このばあいの集団にたいする献身のインセンチヴは何であらうか、それは集団にたいする個人の同一化、しかもたんに仲間のおえではなく、心からの情緒的な同一化である。

ここで集団そのものの性格にふれておこう。キブツへの加入脱退は個人の自由意思が前提になっている。このことは、キブツ生まれの二世にも当てはまるのであって、彼らは一八才で高校を卒業した後に、自由に加入するかどうかの意思決定をする。けつしてキブツ入りを強制されはしない。またキブツではサイレンやベルのような統制の手段は使用されないし、管理機関である書記局の建物がいちばお粗末なものになっている。これらの事実は、この集団では外的な強制や形式的な権威を排斥していることの現われである。さらにこの集団の民主主義的性格をしめすものとして、構成員全員からなる総会がある。その原型は共同食堂での食後の集まりであって各人はこれをとくに改まった集会とは意識せず、自由に集まって相談をした。形式的なリーダーはおらず、すべての人が発言し、すべての事柄がとりあげられた。

重要なのは、このようなキブツ集団の自由な性格と集団にたいする個人の同一化とがたがい不可分の関係にあることである。キブツの構成員も人間である以上、それなりに個人的欲求があり、共同化を遂行する集団の要求との間に矛盾を生じがちである。この矛盾からくるフラストレーションを、集団としてはたとえば構成員の居住地域一円を花園で美化するなどの措置で緩和しようとするが、基本的には構成員じしんが個人的欲求

を内的に抑制しなければならぬ。そのさい絶対に必要なのは、この個人的欲求の抑制が彼らの自由意思の発動としてなされることだが、そうなるための前提は、個人があらかじめ集団に同一化していることである。でなければキブツは個人にとって牢獄と化するだろう。このように集団の自由な性格を支える前提は、集団にたいする個人の同一化であるが、また逆に後者が前者によって支えられる面もある。たとえばキブツにおける人口買動はかなり大きく、現在の構成員の数とほぼ同数の人が過去においてキブツを離脱したようである。この事実は、集団への加入脱退が自由になっている結果、集団に同一化しえた人だけが残り、それ以外の人は円滑に流出したことを示唆している。

キブツの共同化は、このように集団の自由な性格と個人の集団同一化との不可分な関連のなかで発展したのであるが、それは歴史的にみると、ヨーロッパ、とくにロシヤや東欧の都市中产阶级出身のユダヤ人で未婚の青年層が主たる構成員であった。彼らは、知性的ではあるが肉体的労働、とくに農業労働の経験がなかった。文化水準は高いが、それだけに未開地の生活への適応は難しかった。理想主義的、反伝統的であった代りに無資産であった。キブツの徹底した共同化は、このような彼らの長所

と短所とのために可能となり、また必要となったのである。そのさい彼らを扱えた理想主義の内容は、シオニズムと社会

主義であった。前者は、数世紀におよぶ漸散で人間的、社会的に歪められたユダヤ人が土への復帰と肉休労働をつうじて自己救済をはかりながら、国家建設の礎を固めようとするものであり、後者は、資本主義社会の競争と搾取から抜けでて、相互扶助と社会正義と自由平等を基調にした新社会を創出しようとするものであって、ともに現在のキブツ共同体のあり方を産みだす力として作用した。たとえば事務労働よりは肉休労働を尊重する態度や、全員の完全就労と雇用労働の休止や、都市の文化からの独立と自給自足とへの志向などがその現われである。しかし付けくわえればこれらの理想は、開拓者たちがパレスチナの厳しい気候、荒廃した土地、敵対的な原住民と闘いながらキブツを建設したさいに、その行動様式を価値づけ、鼓舞する手段として不可避免的に要請されたものであり、そのいみではこのような苛酷な環境の所産だったとみることできる。

三

これで不十分だが、キブツのきわめて生産性の高い共同化の担い手になっている集団およびその構成員の主体的な性格について、本書の敘述をかいつまんで紹介した。それは私なりに要約すれば、個人がまさに近代市民社会が育んだ自由人として集団を構成し、しかもその構成の仕方は、個人が集団に同一化する

る、いうなればケマインシヤフト的な仕方であった。もつとも歴史的にみれば、彼らはそうすることのできる、またせざるをえない系譜と思想と環境とを与えられていたのであるが。

ところで以上は、社会学者としての著者山根氏によってまた序の口にすぎない。本論はこれから始まるのである。そのばあいの中心問題は、この集団にたいする個人の同一化がどのような構造と機能とにおいて行なわれるかという点であるが、この点については山根氏は、キブツ集団における家族の本質、集団主義的教育とその所産として二世のパーソナリティ、彼らの仲間集団、集団内部における世論の形成とこれをつうずるインフオーマルな社会統制などにかんする分析のかたちで解明を試みている。それは、本書の傍題である社会学的分析にふさわしい内容のものであって、この書評では紹介から除かざるをえなかったところのキブツの変容にかんする動態分析とならんで、本書全体をつうじていちばん精細に富む部分ではなからうか。ただ残念なのは、この本論的な部分の内容紹介をするだけの紙数の余白がもう無くなったことである。

そこでさいごに、私たち農業共同化に関心をもつものためにしてキブツかどんな示唆を与えてくれるかを検討して、結びに代えらるとうしよう。

この書評の冒頭でふれたように、現在の農業共同化のいちば

んの悩みは、ひととおり大規模生産の態勢をととのえ、投資をもした割りには、生産性向上の実績があがらないことである。このことはわが国でもそうだが、ソ連その他の社会主義諸国の共同化でも例には漏れない。その原因は、現在の共同化では各人の個人的利益や物質的な関心が十分に満足されえないことにあるらしく、これをさらに掘り下げると、現在の共同化がいちおう労働の質と量とに比例した分配の方式を標榜しながら、じっさいには提供された労働の質と量とを各人別に完全に計算することが不可能なことである。

マルクスは論文「ゴータ綱領批判」で、やつと資本主義の腹から生まれたばかりの社会主義社会では、あらゆる点で旧社会の母斑が残っており、いかなればシャイロノクの頑固さで他人より三〇分だって長くは働らくまい、他人より一円たつて少ない支払は受けとるまいと念ずる「市民的」権利がまだ支配している。このはい各人は、社会的必要労働の一定部分を提供したという証書を社会から受けとり、この証書によって、消費手段の公の倉庫から該当の量の生産物を社会から受けとる。つまり社会に与えただけの骨を社会から返してもらっているのであると口っている。

だがこのような社会的労働の給付に比例した分配を完全に行なうためには、社会の意識的な管理機能として、現実各人が

給付した労働の質と量とを完全に計算することが必要であるが、このことはきわめて難かしい。R・V・ミーゼスは論文「社会主義共同体における経済計算」で労働をも含めた生産諸要素と生産物との自由市場がないところに価格はなく、価格がないところには経済計算はないとして、社会主義体制における経済計算の不可能を主張した。この主張にいちおう客観性があると想定しよう。そうたとしたばあい、社会主義体制下で各人の生産意欲を昂揚するために、あくまで労働の質と量とにおうじた分配を確保しようとするならば、生産要素としての労働について自由市場と価格とを実現しなければならぬ。それは、資本主義経済の機能的復活である。

このことは、ミクロの社会主義ともいえる農業共同化にも当てはまると思う。その生産性向上のインセンチヴがあくまで各人の個人的利益や物質的関心を満足することとすれば、そしてこのためには各人の労働給付の質と量とにおうじた分配を確保しなければならぬとすれば、それには分配の形式を労働市場で形成される貨銀の支払に改めるか、またはモシヤヴ・オヴティムのように家族単位の個別経営に分割して、分配そのものの必要をなくするよりほかはない。前者は共同化の資本主義的変質であり、後者は共同化の解体である。

だが共同化をそのまま維持しながら、生産性向上をうながす

途はないか。キフソが示した途がそれである。そしてこのばあ
いの決め手は、各人が前述したシャイロノクの「市民的」権利
の支配から解放され、集団にたいして完全に同一化しているこ
とである。